

後悔による過去の制作

——歴史の連続と断絶について——¹

小 松 惠 一

Abstract

The Constitution of the Past by Repentance

The consciousness form of "regret" or "repentance" is a personal one at first. It expresses a certain attitude towards the "past". In other words, it is especially a negative evaluation of the "past." However, it is not simply an evaluation, but a consciousness that tries to "disconnect" the "past" with the "present." "Regret" is a consciousness that tries to cut off the "past" that could define and create the "present".

It would be possible to expand such a state of consciousness into the historical context. The individual has not only

後悔による過去の制作

a mere personal experience, it is also inevitably placed in a historical context that he cannot determine by himself. In such cases, he often cannot help becoming aware of the relations between himself and history. People of the future generations can also use their imagination to put themselves into a history they do not actually share. In doing so, history can be their own problem.

For example, Heidegger. He was involved with the Nazi and supported its ideology. He is still debated as a Heidegger-problem because his philosophy exerts strong influences upon the intellectuals. Anyway, Heidegger has no regrets. In other words, Nazi involvement was inevitable for him, or there was no other possibility, at least he's not at fault in his participation in Nazi movement. Here the consciousness of "disconnection" cannot be recognized at all.

Adorno is the person who coined the term "Vergangenheitsaufarbeitung". At least he spread it around the intellectual world. He rejects the historical persistence of the Nazi in the form of "forgetting", "covering up", and "relativization". "Vergangenheitsaufarbeitung" is a means to avoid such forms of historical connectedness or continuity. We must undermine authoritarianism, which causes adaptation and conformity to reality. To establish such a tendency, there is no other choice but to bet on democratic education or enlightenment.

In the Federal Republic of Germany, "Vergangenheitsaufarbeitung" has become a political issue. It is, so to speak, the institutionalization of "regret" and such an activity is made into the public property. Of course, the movement doesn't go forward in a straight line. There is a difference of commitment depending on political positions, there is also fierce controversies about a historical position of the Nazi. However, in Germany, there seems to be settled a repetitive confrontation with the own past because a ghost which once existed occasionally appears.

Die Zeit wird zum Raum

aus Parsifal

R. Wagner

1 はじめに

ある「過去」の出来事を思い出す。そのとき、多くの場合「楽しかった」、「面白くなかった」、「無駄だった」、「懐かしい」、「苦しい」、「恨めしい」、挙げてゆけば切りがありませんが、ある種の「感情」、「情動」、「評価」に彩られて思い出される。「全体としては意味がなかったが、あれだけは良かった」というように部分を拾い出す、また、「あいつがいなければ」、「別のことをすればよかった」、「すべきではなかった」という「非現実」の想像を伴って思い出されもします。非現実の場合であっても（あるいはそれだからこそ）、ある種の「感情」あるいは「評価」の観点を前提しています。何か過去の客観的な事実を確認しようとする場合、たとえば、家計簿を付けるために昨日の買い物物の代金を確認する、ということもあります。「昨日はCDを五枚買ったが、七、五九〇円だったか」というように領収書を確認する。しかし、そこでも当然、「はたしてこの買い物物は正解だったかどうか」という思いを伴っている。

もちろん過去に限らず、現在における進行中の出来事もまた、さまざまな感情、評価に付きまとわれておられます。「牛田君がショパン・コンクール第三次予選の名簿に載っていない。」、「そんな馬鹿な」という「驚

き」を伴っております。そうした「いままさに」聞いた報道は、時間が推移してゆくにつれ、「過去」となり、苦いか、喜ばしいか、懐かしいかわかりませんが「思い出」となる。

ここで取り上げようとするのは、「過去」の意味を大きく左右することになる、いま述べたような「感情」あるいは「評価的感情」です。とくに「後悔」、「悔恨」、「慙愧」というあまりポジティブではない在り方を
する感情です。

ここでちょっと注意すべきであると考えるのは、こうした過去にまわりつく「意識」を「感情」と名付けてよいのかどうか、という問題です。何か過去の「事実」自体が存在し、それを評価して「感情」がその上に貼り付けられる、というように事は進んでいかないでしょう。むしろ、そうした「情動」は、『存在と時間』ふうによれば、自己に襲い来ること、むしろ「世界」を開示し、「世界内存在」という「自己」の在り方そのものを示しているということになるでしょうか(SZ, §29, 30)。ハイデガーは、とくに「過去」にまつわる、あるいは「過去」という「世界」の存在論的情態性を述べているわけではないでしょう。そこにはもちろん、時間性が関係してくるわけで、過去といえどもたんに「過ぎ去ってしまった」とは言えず、現存在の存在可能を構成している。とするならば、「情動」は既在の世界を作り出している、と同時に現在の自己の在り方を構成するものである、といえるのではないのでしょうか。

2 歴史的想像力

ここで話題として取り上げたいのは、「過去」にかかわる、あるいは「過去」の世界的情態性を示す「情

動」です。しかも、さまざまに名付けられる情動のなかでポジティブではないもの、たとえば「後悔」です。それを現存在分析あるいは存在論としてハイデガーを援用して進めようというのではありません。ハイデガーには後悔はありませんから。むしろ、具体的事例にもとづいて、そこでこうした「情動」が、あるいはこうした「情動」の拒否が、どのような過去を生み出しているか、を見てみたいのです。

さて、過去にどのように関わるのかという問題に突き当たったとき、歴史的想像力が重要になってくるのではないのでしょうか。カントは、『純粹理性批判』第一版で認識の成立における *Einbildungskraft* の重要性を説いていました (*Kritik der reinen Vernunft*, A100 以下)。構想力(想像力)とは、カントに言わせれば、「直観の多様をある形象にもたらす」*das Mannigfaltige der Anschauung in ein Bild bringen* (A120)。まさにそうした意味で、歴史家は歴史記述する際に、想像力を働かせなければなりません。限定されてはいるが多様な資料、あるいは、つぎつぎと新たに見出されてくる史料から歴史を再構築してゆかなければならないからです。しかも同時に、想像力の過剰もまた戒められる。つじつまの合わない荒唐無稽な歴史を作り出すおそれがあるからです。つまり、想像力の可能性と限界を意識しなければならぬことになります。そこに史料の価値、その位置づけの適正さ等、ある種「客観性」あるいは「手続きの妥当性」が問われることとなります。

2・1 「そこに身を置き入れる」、「自分と関係がある」

歴史的想像力は、そうした学問にかかわる場合のみならず、たとえば当事者の立場に自らを置き入れるということがありえます。それは難しいし、ほとんど不可能であるともいえます。そこにいろいろな哲学的仕

組みが考えられてくるということもある。了解の基盤として「感情移入」が取り上げられたこともあり、また。ハイデガーはこれを否定するでありましょう。やはり、世界内存在の一契機としての情態性にもとづくということになりますか。千年前の十字軍の虐殺あるいはチンギスハンによるヨーロッパにおける残虐を思い浮かべて、そこに身を置き入れるというのは、かなり難しい。しかし、比較的現代に近い時代においては、情報量もありまだ想像することはしやすいかもありません。フォークナーのヨクナパトウファ・サーガでは、現在という時間は、自分と祖父母、祖父母の記憶のなかにある祖父母の祖父母、という具合に、そのなかに一五〇年程度の歴史が記憶として生きているのだということが実感されるように構想されております。吉田秀和は、一五〇年くらい前、明治維新前後を「つい最近」と言っております。ある意味で明治維新および明治時代をいままさに生々しく感じている政治権力者もおります。ハイデガーは「つい最近」まで生きておりましたし、戦争はたかだか一〇〇年前にも満たない過去です。

「身を置き入れる」ということが多少なりとも想像力と歴史的知識によって可能であることを前提として、そうした想像が緊迫してくるのは、自分がどのように生きるか、あるいは行為するかを迫られる状況、ある極限的狀況にあるという想像です。あるいは、そうした状況で生きた人の身になってみるという場合です。特に現代史の場合、問題は錯綜し価値観が問われてくることにもなります。辺見庸は、そうした発想を入れ込んで南京大虐殺を中心とした本を書いております（辺見庸『1☆9☆3☆7』、二〇一六）。

たとえば、わたしが日中戦争から太平洋戦争の時代に生きていたら、そのとき何をしたのだろうか、と想像します。当然ながら、その時の年齢によって体験は大きく異なることになるでしょう。学生のような年齢であれば、徴兵されて、わたしのような軟弱な人間は、あつという間に中国か南の島で戦死、あるいは、わた

しの叔父のようにガダルカナルで餓死していただしよう。一九三七年一二月に日本陸軍の兵隊として南京に行かなければならなかったら、などとはあまり想像したくありませんが。またもし、徴兵されるような年齢でなければ、斎藤茂吉や高村光太郎など多くの有名な人（あるいは知識人）も含めて多くのひとが示したように（わたしがそのときどんな職業であるかは分かりませんが）、太平洋戦争開始の勝利に快哉を叫んだかもしれないし、もっと積極的に何らかの仕方で戦争に加担したか、あるいは、おそらくは何もせずひっそりと歴史の暴風雨をやり過ごそうとしたかもしれませぬ（これで非現実の語りについて哲学しようとするのではありませぬ）。

もし戦争を生き延び、戦後の生を許されていたなら、たとえば天皇陛下万歳を唱導し軍国主義の急先鋒であった（少なくともそう説いていた）教師たちが民主主義を唱えだすような姿にはなりたくないものだ、とは思います。小林秀雄は、けっして後悔などはしない、頭のいい奴はたと後悔するがいい、というような意味のことを言っております⁽³⁾。これは、もちろん彼が戦争について極めて肯定的な発言を繰り返したことを後悔していない、という意味でしょう（Vgl. 上掲、辺見²269-273、277-8）。それは、いま述べたような容易に変節するものたちの姿が醜かったからでもあらうし、また、その時代状況の中でそれぞれが課題に直面し精一杯生きていたのであり、「現在」の特権的立場から自分の「過去」を断罪するという行為は軽薄であり傲慢であると感じたからでもありましよう。

それについて、たとえば大東亜戦争あるいは太平洋戦争を賛美する詩を書いた高村光太郎は、花巻郊外に七年間隠遁して自己の戦争協力について自省することになりました。国家のために死ぬことを理論化した田辺元は、北軽井沢に隠棲しました。かれらのそうした態度が、「時流」にのる功利的便乗主義的なもので

はないとしても、それぞれの時代に自分では誠実に対処していると信じて疑わない真面目人間の真面目な「変節」でないのかどうか。

従軍し幸いにも帰還した兵士たちのなかには、アジア大陸で強姦し、食料を盗み（調達し）、現地人を殺し何の後ろめたさを覚えなかったひともいたでしょうし、覚えたにしても生きるためには「仕方なかった」と割り切る、あるいは割り切ろうとするひともいたでしょう。ともかく、多くの庶民は戦後の混乱を生きるのに精一杯だったかもしれません。

何がなされるべきであったのか、という問いよりも、ここでは、自分ならどうしただろうか、と戦後生まれの人間が想像してみることです。そういう意識が初めて、歴史がたんに過ぎ去ってしまった過去 *die Vergangenheit, die vergangen ist* ではなく、自分にとって問題として現れてくる。

2・2 「後悔」の構造

それは、「行為者」の立場に立つ、ということになります。歴史に携わる、歴史を研究する、歴史を見る場合、「行為者」の立場に立つというより、むしろ「観察者」の立場に立つのではないのか。歴史に登場するさまざまなファクターの軽重を測り、出来事の連鎖を因果的に結び付けてゆく、というのが「歴史」ではないか、ということです。もちろん「観察者」の場合も、そこにある種の「視点」あるいは「枠組み」がなければ、そもそも対象に接近することはできないでしょう。しかし、そうした視点も、歴史学上の「客観性」基準を満たしていなければならない。

「後悔」あるいは「悔恨」という「過去」への態度、それらの様態と切り離せない「過去」の在り方が可能となるのは、「観察者」としてではなく、「行為者」として「当事者」として「過去」に関わっていることを条件としている。

「当事者」であると想像する場合、その歴史的想像力とは、第一義的には個人に関わるものです。たとえば「あのとき別の行動をしていれば・・・」Wenn ich damals anders gehandelt hätte というような個人的な「後悔」です。Ich hätte gestern abend nicht so viel trinken sollen. そうした「後悔」が、カントの区別で言えば、「仮言命法」から生まれてくることもあります。ほとんどそうでしょう。

「もし昨晩ちゃんと勉強していたら、試験は落ちなかった。」だから「昨晩は、ちゃんと勉強すべきだった。」こういう「後悔」は、行為のある種の因果関係を前提としており、一種有用性を目指す戦術としての「後悔」です。

そうではなくて、端的な「後悔」は、もちろん「定言命法」に対応しております。「道徳」の端的な命令「・・・すべし」に従うことができなかった。だから、「すべきだったのにしなかった」という意識が生まれてくる。カントの『実践理性批判』の構成では、「後悔」は人間の「自由」という道徳の存在根拠を証しするひとつの論理として展開されます。つまり、道徳は「理性の事実」としてすでに承認されて蔽として存在する。そうした道徳を前提にせずに、「後悔」は不可能である。「後悔」することは、過去において他の行為が可能であったはずだという前提がなければ生じない意識の在り方で、それを可能にしているのが「道徳法則」です。Du kannst, denn Du sollst 「汝為すべしであるが故に、為しうる。」為すべきという「当為」の意識は、行為の自由の地平を切り開く (Kritik der praktischen Vernunft, erster Teil, 1, 3)。

「後悔」は、「自己」に関わります。事実としてある特定の自分の「過去」は否定はできないけれども、否定したいという二律背反的な状況にあります。「過去」をなるべく否定し、事実的な「過去」とは別のありべき「過去」を見ている。過去を断ち切りたい、そして別の「いま」があれば、という欲求。自己の歴史のなかで、ある「断絶」を求めている。

「過去」にたいして「後悔」と別の処理をする仕方のひとつに「復讐」*Rache*があります。「復讐」というあり方は、自己のなかに他者が入り込み、自己を構成している。そのとき自己は、他者との関係の「過去」に強固に捕らわれております。「復讐」は「過去」を絶対化する。ある特定の「過去」の出来事が「現在」の自分の在り方の最大の原因となっている。さらに、「復讐」は、ありうべき「未来」を「復讐」の実現という形で規定してくる。「現在」の状況に満足してはいないことはむろんのことですが、「現在」を変えたいというのではなく、「未来」において「過去」を相殺しようとする。未来における過去との断絶。

3 「後悔」の政治的形態——*Entnazifizierung* と *Vergangenheitsaufarbeitung*

3・1 *Entnazifizierung* は、道徳的問題ではない

ハイデガーは後悔しません。歴史的想像力について述べましたが、もちろん、わたしがハイデガーであつたら後悔するか、などと想像することは、能力としてもおそらく性格としても、あまりにも違いが多すぎて、一片の想像力も喚起しません。しかし、たとえば、その当時学生としてフライブルクやハイデルブルクあたり、シュヴァーベンの田舎にいたら、ハイデガーの魔力に魅入ってしまったのかどうか。*Heidegger*を始め、

Heinsoeth, Rohaker, Herrigel, W.Bröcker, K.Schlechte, Bollnow, Walter Schultzなどの各地の哲学教授陣がNSDAPに入党するのを見て、どう考えたか（Gadamerは入党していない）。ハイデガー自身は、総長となって積極的にナチ体制に加担したが、一年足らずで幻滅と軋轢のなかで辞任する。その辞任のいきさつについてもいろいろな解釈があるとは思いますが。さらに、その後基本的に政治的活動とは無縁の学究生活を送ります（ナチ黨員や辞めていない）。

その後、第二次大戦開始後、学生が徴兵されて戦争に行くこと、そして多くは死んで戻らなかったこと、『存在と時間』を背囊に入れて出征してゆく学生も多かったことにどういう思いを抱いたのか（南原繁は痛切な思いをもっておりました）。こういういわば「良心」にかかわるような、あるいは感傷的な「過去」への総括をハイデガーはもちろんいたしません。

Enthazifizierungとは、基本的に政治的な手続きで、ナチ残党とナチの影響力を排除することです。もちろんそれは占領軍の指示によるものです（ナチを完全に排除すると、政府機関が立ち行かなくなるので、多くがまた採用されております）。

ハイデガーの Enthazifizierung は、フライブルク大学当局によって行われましたが、紆余曲折を経て、結局のところ、大学での授業は禁止となりました。参照する文献としては、私が使っているのは、フーゴ・オットの『マルティン・ハイデガー 伝記の途上で』（北川東子他訳、未来社、一九九五）のみです。それを読むとかなり錯綜しており紆余曲折を經過ります。そこにまたイデオロギーと権力闘争と個人的恨みつらみが絡んでくるような印象も受けます。その経過はオットに任せるとして、ハイデガーの自己弁護について多少述べます。ハイデガーが「後悔」しないということは、第一義的には、「過去」の正当化を意味することに

なりますが、もちろん、自分の行いは正しかったのだ。あるいは、ナチは基本的には正しかった、いろいろな勢力の権力闘争でねじ曲がった、真正ナチを貫徹するべきだったのだ、ユダヤ人が殺されてもしょうがなかったのだ、とは言いません。

ではどんな言い訳をするのか。これもオットの記事に基づくとおおよそ次のように整理できます。(日本語訳、四五六頁、四五七頁、四八四頁)

1. NSを支持したが、それは民族的基盤でドイツ民族の精神的変革を意図したからである。(レーム一揆からそれが誤りであると分かった。)
2. 国家社会主義に西洋文明を共産主義の危険から救い出すことを期待した。
3. 生物学主義によるドイツ民族の基礎づけ、ユダヤ人の排斥を否定していた。
4. 党内で役職についていなかった。党内で活動したこともない。
5. 学長職に就いたのは自分の意志ではなく、また自分の意志で辞職した。それは党への自分の立場を示すものである。
6. 学長職は、より事態が悪化するのを防ぐためである。
7. 辞職後、党はわたしに対する侮辱、妨害をしている。

こうした言い訳あるいは弁明が当たっていることもあるでしょうし、ハイデガーが多少歪めている可能性もあるでしょう。事実関係が問われるところですが、立場が違ふとかなり様相を異にするようで、なかなか

理解しづらいところがあります。1.で言われているような変革あるいは革命がナチによって可能かどうかを考えたのか。ナチのどこに可能性を見ていたのか、わかりません。また、オットも言っておりますが、この共産主義の防波堤というような発想は、二〇世紀末ドイツで行われた、いわゆる「歴史家論争」でも登場したテーマです。

こうした「言い訳」をしても、Lehrverbotという処分が下りました。その処分が妥当であったかどうかは分かりません。しかし、ハイデガーにとっては不満だった。自分は悪くない。そのときの状況の中で運命として決断したのだ。つまり、ハイデガーの「過去」は、他者から見た「過去」とは違っていても、正当であり、それ以外になかった。そこには「過去」と「断絶」すべき何の理由もないことになります。歴史は「持続」している。「存在の歴史」が貫徹している、と言うかどうか。あるいは、das Manに verfallen しているだけなのか。

3 - 2 Heidegger-Kontroverse

ハイデガー自身は後悔しないとしても、かれのナチ関与をどのように総括するか、aufarbeiten あるいは überwinden したのか、という問題は、他の人間が放っておきません。とくに『存在と時間』とナチの思想・行動とに哲学的、論理的、心情的類縁性はあったのか、その哲学がナチ関与を生んだのか。有名な話ですが、一九三六年日本に亡命する直前、レーヴィットはローマで講演旅行のハイデガーに会いました。そのとき、レーヴィットがあなたのナチ参加はあなたの哲学の本質に由来する Deine Parteinahme für den N.S. liegt im Wesen deiner Philosophie と言ったとき、ハイデガーは大きく頷き、「歴史性」の概念がわたしの政治的「出

撃」の基盤なのだ Mein Begriff von der <Geschichtlichkeit> ist die Grundlage für meinen politischen

「Einsatz」ナチ関与は自らの哲学の結果であると述べた」と報告しております。(Karl Löwith, <Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933>, Neuauflage, S.58)。しかし、「先駆的決意性」というような一見おどろおどろしい概念は、ヒトラーの演説の雰囲気には適合するような印象もありますが、その形式性は、ナチのイデオロギーを(直接的に)含むものではないように思います。また、ハイデガーは明らかにナシヨナリストですが、『存在と時間』の歴史性が何故に民族の歴史性へと展開することになるのか、その両者は媒介できるのか、その結びつきが哲学上論証できるとしても、なぜドイツ民族でなければならないのか、NS(あるいはその可能性)でなければならないのか(レーヴィットの皮肉を思い出します。存在の歴史はなぜヨーロッパを優遇しているのか <Denker in dürftiger Zeit>, S.166 in: Karl Löwith *Sämtliche Schriften*, Bd.8)。

もちろん、そうした疑問の前に、事実としてどのようにハイデガーがNSとかかわりをもったのか、ハイデガーは確信的ナチだったのか、Antisemitだったのか(その反ユダヤ主義の内容がまた問われるわけですが)、など事実により多くかわる問いが立てられます。そうした事実にかかわる問題、また上記のような哲学上の問題は、「ハイデガー論争」Heidegger-Kontroverseとして知られています。しかし、ここではそこに踏み込みませんし、余力ありません。ただ、結論としては、

ハイデガーは確信した überzeugter ナチであり、反ユダヤ主義者だった。

これがいま公式の見解として一般化しております。もちろん、それは一定の皮相さを纏わざるを得ません。

だから何なのだ、ということに（日本では）なるかもしれない。哲学と具体的行動は別だ、ということも言えないこともないでしょう。かれは人間はダメだが、哲学は素晴らしいのだ、とか（あるとき『夫婦善哉』を書いた織田作之助が、「人間は本当にいい奴だが、どうしようもないつまらない小説を書くのと、人間は本当にひどいのだが、素晴らしいものを書くのと、お前ならどちらを選ぶ」という問いを立てたことがあったそうですが）。ナチ的であったにしても、特別にハイデガーのナチ関与はほんの一時期のことにはすぎない、NSのある特定の局面、特定の可能性に入れこんだのだとか、反ユダヤ主義も人種の生物学的なものではなかった、ただ近代の象徴だった、あるいは、学長職の挫折後、いろいろ批判的になっていた、といった弁護は可能ですが、ナチだが、すごい哲学なのだ、と言ってはいけないのでしょうか。

しかし、ドイツではどうも違うようです。皆さんご承知のように、しつこいくらいに追及されております。

「ハイデガーは自身の国家社会主義の過去を *aufarbeiten* することはなかった、そうする可能性もなかった。その理由は、自身の以前の立場から一生離れなかったからである。それを結局明らかにしたのは、いわゆる「黒ノート」である。――（中略）――ここでも、ナチの歴史は逆転し、かつての犠牲者が今日の下手人だと説明される。ドイツの（そして自分の）罪を回顧して抹消する、それは「世俗ユダヤ主義」 *Weljudentum* への一貫した非難とともに、たんなる逸脱であるとか、いわゆる非政治的人間の思い違いをあらわすものではなく、むしろ、ハイデガーの志向の基礎を形成している。――（中略）――二〇二五年二月にフライブルク大学は、ハイデガーが占めていた教授ポスト（それは師であるフッサールの就いていたものでもある）を廃絶すると発表した。それは、いまだに持続するハイデガー問題における大学政治上、文化政治上のパラダイム転換を

示唆してゐる。」(Lexikon der <Vergangenheitsbewältigung> in Deutschland, S.240, transkript 2015) これは事典の記述なのですが、ある程度現在のドイツの公的な共通認識を示しているのではないのでしょうか。

4 アドルノの帰還とVergangenheitsaufarbeitung

アドルノは、この「過去の総括」を推し進める立場の人でありました。ハイデガーとはイデオロギーとしては正反対にいたと理解されております(結構、晩年のハイデガーと構造的に近いと最近よく言われております⁴⁾)。彼は、一九五〇年代後半、アデナウアー時代の保守化、あるいはナチ残党、ナチ的なものにはたいする追及の手が緩んできて、「もういいじゃないか」という雰囲気の中なかで(とくにハイデガーのドイツ哲学会における地位が「国宝」級に高まるということもあり)、「過去」を「忘却」することに警告を発しております。

批判理論第一世代はナチの迫害を逃れて亡命しておりました。そのひとたちがドイツの大学に戻ってきました。そういう亡命からの帰還者というあり方が事態をより一層複雑にします。かれらは、被害者であり、犯罪とは関係なく、いわば無垢であったからです。だから、大手を振って批判する権利があった。それがドイツに残った(残らざるを得なかった)協力もしないが抵抗もしなかったが、戦時中大変な苦勞をしたたいいての国民、知識層にどのように映ったか。

「亡命論争」Exildebateと言われる一連の議論があります。もっぱらトーマス・マンをめぐる問題です。周知のようにかれは、戦争中ビヴァリーヒルズに暮らし、アドルノやブルーノ・ワルターなど亡命知識人、

芸術家と交流がありました。やはり、BBCの依頼でレコードに録音した演説をラジオでドイツに向けて放送しており、反ナチのプロパガンダに携わっていた。そういうひとからお説教されるのは、ドイツに残った、あるいは残らざるを得なかった「内的亡命」をかこっていた作家、知識人にとって、一般のドイツ人にとっても愉快ではなかったでしょう。小林秀雄であれば、さぞかし嫌ったことでしょう。マンは、その放送を通してドイツ人の責任を示唆しております。それが戦後に罪はドイツ人全体にあるのかどうかという議論を呼び起こした。つまり集団責任 Kollektivschuld の問題です。

そういう背景があってもアドルノは戻ってくるわけですから（一九四九年）。しかも、大学ではまったく優遇されていません。それでも結局、アメリカよりもドイツであったわけですが、アドルノ自身の告白によれば、ドイツの伝統と切れない、ドイツの伝統に反対していても切れない、というのです。ドイツに帰れば、過去の災いを繰り返さないよう何かできるかもしれない、「要するに、わたしが子供時代を過ごした場に帰りました、人生で実現することは、子供時代を変化を経ながら取り戻すことに他ならないという気持ちから帰りました」(Vermischte Schriften I, S.394f)と、ベンヤミンのように言うのです。歴史の伝統の威力が、あれほどの苦難を経験した後には、持続している。それはむしろ、ナチ的なものではなくドイツのまったく別の源泉に由来する伝統でしょうが。

<Was bedeutet: Aufarbeitung der Vergangenheit> (GS 10.2, 555-572) という講演は、一九五九年、つまり CDU アデナウアー政権時代、現在とは雰囲気異なる保守的な揺り戻しの状況で、キリスト教ユダヤ教協力調整会議 (Koordinierungsrat für Christlich-jüdische Zusammenarbeit) で行われております。

Vergangenheitsaufarbeitung」という言葉は、アドルノの講演で用いられ人口に膾炙するようになりました(Habermas, Was bedeutet die Aufarbeitung der Vergangenheit heute?, 03.04.1992 die Zeit)」。Aufarbeitungの意は、「過去をまじめに受け止め、曇りのない意識によって過去の呪縛を絶つ」(GW10.2. 555) ことにあります。しかし、NSはまだ生きながらえており、Aufarbeitungも変質してしまい、過去に区切りをつけ、過去を記憶から消し去るという意味をもつようになってい、このことです。それをアドルノは、歴史喪失 Geschichtsverlustと呼んでおります。そうした傾向が根強い理由を探り、それを抹消して本来の方向へと展開させることが、この講演の趣旨です。

一般的に、過去を見据えない理由は、罪悪感 Schuldcomplex に帰されている。そうしたコンプレックスがドイツ人のあいだで広まったのは、Kollektivschuldという考え方が言われてからだという。罪の意識があれば、「過去」はなるべく思い出さたくないということになります。思い出しても婉曲な書き換え euphemistische Umschreibungen が選ばれる。極端な場合には、生起したことが否定され、あるいは矮小化される。あるいは、アウシュヴィッツとドレスデン(または、東方からのドイツ人避難民の被害) が相殺される。

しかし、コンプレックスという言葉は、罪を一種の精神状態へと解消してしまう危険性がある。そうではなくて、上記のような矮小化は、意図的なものです。そういう矮小化、歴史の忘却は、保守的社会状況に適合している、ある意味で合理的である。それは、克服されていない権威主義的メンタリティ、権威主義的伝統の持続によって、社会に順応 anpassen している状態だということになります。

権威主義的性格は、どんなものであれ現実の権力と自己を同一化する、それは弱い自我であるが、それゆえに、代償として巨大な集団との同一化と集団による防衛が必要とされる。ファシズムが抑圧と苦難である

とされるだけでは間違いで、ここでは集団ナルシズムにつながるような安心感が作り出され、虚栄心が肥大化した。「心配してくれるんだ」Es wird gesorgt. そうしたナルシズムは、敗戦後も継続している。経済の奇跡がそれに寄与している。「わたしたち勤勉なんだなあ」Wie tüchtig wir sind.

もっといろいろなことを言っておりますが、結論部分は結構平凡です。しかし、それしかないとはいえない。つまり、問われるべきは、民主主義であり、民主的啓蒙である。民主的啓蒙は、そうした教育にすでに態勢ができている人しか通じないかもしれないが、そうした人々を強化しておくことは抵抗のためには重要である。忘却ではなく、意識化すること、それが啓蒙の第一歩。

こうした発想は、ハイデガーにはまったく無縁でしょうし、かえって軽蔑されるかもしれません。しかし、いろいろ問題を含みながら、政治的状况のなかで揺れ動きながら、戦後ドイツはこの方向をとったと言えるのではないのでしょうか。その方向からはみ出す運動があれば、それに対して反作用が生じる。数多くの論争、あるいはいわゆる「論争文化」Debattekultur はそれを示しております。

5 「過去の克服」——公共的悔悟

ハイデガーは後悔しておりませんが、死後もいわば強制的に自分の「過去」に直面させられ続けております。それは個人の Schuld を問うということになります。しかしここでは、より集団的、国家的なレベルで歴史的想像力が要請されることとなります。つまりドイツ連邦共和国として公共的に「過去」の意味を作り出す努力がなされたわけです。

ドイツは、第二次大戦の徹底的な敗北以降、現在に至るまで、「過去」に捕らわれ続けています。過ぎ去ろうとしない過去です (die Vergangenheit, die nicht vergehen will)。ドイツの「過去」への関りの一環としての「過去の克服」Vergangenheitsbewältigung あるが、「過去の総括」Vergangenheitsaufarbeitung と呼ばれる政治的思想的運動は、第三帝国の一二年間を総括し、その忌まわしい過去に決着を付けようとする、戦後直後に始まり、現在もお終わらない運動です。これは「後悔」の公共化といってもよいでしょう。もちろん「後悔」しているだけではありません。それは、連邦共和国の存在証明として、法的、政治的、文化的さまざまな局面にわたって遂行されなければならない。

占領軍によって始まり、ドイツ政府自身によって行われるようになった「非ナチ化」がその重要な第一歩ですが、それが不十分であり、たとえばアデナウアー時代に揺り戻しがあったことは、多く語られております。また、ホロコーストをはじめとするナチの戦争犯罪のさまざまな局面が、毎年のようにしつこいほどに映画化され、それだけでなく戦後のドイツ人一般、あるいは教育界に残る権威主義がさまざまな小説、映画で現在に至るまで描かれています。

さらに、ここにドイツ統一という事態が加わることになりました。東ドイツの過去、とくにシュタージ STASI による監視国家あるいは全体主義的抑圧をどのように総括するかという「過去の克服」の問題が生じてきた。これは、もちろん西ドイツの視点で行われていることで、旧東ドイツの住民にとっては、自分たちが aufarbeiten される対象となったわけです。東ドイツの市民と言っても、さまざまな役割があったわけで、抑圧側・被抑圧側に分かれるですから一律ではありませんが、意識の上では旧東側市民全体の問題となっております。いま neue Bundesländer で AfD の得票率が二割近くになっているのを見ると、東西の視点の違いを

感じざるを得ません。

ともかく、(日本と違って)その「過去の克服」は、まさに「過ぎ去ろうとしない過去」として今もなお問われ続けております。つい最近も、オーストラリアのジェノサイド研究者から、ドイツの過去を問う仕方が教理問答 *Katechismus* だとして挑発があり、ふたたびホロコーストと他の残虐(とくに植民地における)の比較をめぐって論争がありました。^⑥

こうした執拗さには、さまざまな理由があることは想像がつかます。そうした総括にたいする(ドイツ人の特に知識層の)情熱の由来を、ドイツの地政学的位置に由来する戦術なのだとすることも可能かもしれません。しかし、戦術としての「過去の総括」というのは、やはり浅薄にすぎます。そうした「追憶文化」*Gedenkkultur*、*Erinnerungskultur* にたいするさまざまな反対運動がいまドイツでも行われております。それでもやはり、基本的には「慙愧」あるいは「反省」にもとづく、倫理的で公的な「過去」の意味の確定作業であると理解します。

「過去の克服」を総括的に言えば、「新たな民主主義体制がその都度揺れ動きつつも、過去の民主主義的ならざる国家体制にたいして態度を取る行為や知」であり、「新たに創設された民主主義体制が、過去の国家体制の構造的、人的、心的残滓とどのように関わるかという問い、およびそうした民主主義体制が、その重荷となる歴史にたいして、政治的文化のなかで自己を明確にしつつどのような態度を取るか」^⑦が問われる。そのように総括できる運動は、実際には、占領軍あるいは政府の機関、歴史家、哲学者、ジャーナリスト、報道機関などさまざまな媒体を通して多様に、非体系的に行きつ戻りつしながら行われてゆきます。

こうした「過去の総括」の特徴は何か。E. ケーニツヒにもとづいてその特徴を挙げれば、次のようになります。

1. もちろんその目的は、忌まわしい過去の反復を防ぎ、政治上の新たな始まりを刻印するということ。
2. その手段としては次の五つが挙げられる。

加担した組織の禁止、実行者の処罰、加担した人間の権利剥奪、犠牲者の復権と補償、過去の公共的な

Aufarbeitung

3. 政治における具体化

3-1 法の整備、立法や司法のイニシアティブと活動、行政の活動、

3-2 政治文化のレベル さまざまな社会的集団や組織が議論に参加して、意識形成、意志形成に携わること（教会、大学、メディア、労働組合、政党、組織など）

3-3 政治的心情のレベル 国民の「過去の克服」にたいする態度、意見（Vgl. 註（7）H.König, ebenda）

ごく目につきやすいものを挙げれば、一九四五年敗戦後、占領軍による *Entnazifizierung*、*Nürnberger Prozess*、損害賠償法、ナチ戦争犯罪の時効の無効、戦争犯罪者の探索（有名な例では Fritz Bauer の Eichmann 探索とか）、いまだに続く戦犯裁判、さまざまなホロコースト関係の記念碑・施設の建設、現代史研究所の設立、教科書における公共的なナチの総括など。これらは公的機関がかかわるもの。そのほか、敗戦後早期に話題となった Max Picard: *Hitler in uns selbst*, Karl Jaspers: *Schuldfrage* などを嚆矢とするさまざまな無数の著作、論争、たとえば、「歴史家論争」、「ハイデガー問題」、「ドイツ抵抗運動の評価をめぐる論争など。とくに学生

紛争以後、大学（人）のナチ協力問題の再燃など。

こうした「過去」との関りは、中立的あるいは「客観性」を旨とするような歴史学（一応そういう学問性があるとして）を前提としつつも、それ以上のものを求めています。そこには、ゆるがせにできない基本的秩序に基づく人権を尊重する民主主義を確立し、促進するという目的があるからです。

かつての歴史哲学は、レーヴィットに言わせれば終末論の世俗化であり、過去をある特定の終末（あるいは）目的に至りつく過程として整序し、ある特定の「過去」のシステムを作り出してきたわけです。そこでは、歴史のなかのさまざまな個別的な「瓦礫」の堆積、「断絶」していると見えるものが実は「連続」なものとして回収される。それとは異なり、「過去の克服、総括」における「過去」は、人権の尊重と民主主義という「目的」から逸脱しているが故に主題化されず。

「歴史の克服」では、歴史の連続性と断絶との関係が従来の歴史哲学とは別の形で問われてきます。過去が抑圧的であり忘まわしいものであれば、過去あるいは伝統の持統は疑問にさらされます。むしろ、歴史の「連続」、「持統」を断ち切り、「断絶」を生み出そうとするものです。問われているのはもちろん過去全体、伝統全体の連続あるいは断絶ではありません。

しかし、ある個別的な歴史伝統を取り出してそれだけ排除する、あるいは持続させるということが、果たして可能なのか、そもそもそれはどういう意味をもつのかという問題はなかなか難しい。歴史とはさまざまな局面が複雑に絡み合っているからです。むしろ、「歴史の克服」運動においてはなおさらですが、排除する伝統、保持する伝統は意識して、いわば無理を承知で断片化され選び取られるものです。そして長年の意図的な努力によって公的な承認を得る。しかし、また揺り戻しがやってきて、また論争が起こる。その繰り返

返しです。歴史とは、何を選び取るかという闘争がせめぎあい形成されてゆく。ただたんに「伝統のずるずるべったりの侵入」ではない。そこに「歴史の連続性」と「歴史の断絶」のダイナミズムがある。

過去のなから記憶に値するものを意識的に選び出し、あるいは選びなおして現代に再生する。それを（ヨーロッパの）「伝統の最良のもの」として、受け継ごうとする。「歴史の連続性」とは、歴史の連綿とした時間的な経過を言うものではありません。それは、実体的な伝統として歴史を通じてある同一性を保持して持続するものでもありません。むしろ歴史は、意識的な選択による「断絶」を入れこみながら、連続性を作り出す。レーヴィットの言葉で言えば、「連続性は、しかし、たんなる進行以上のものである。それは、伝来のものをたんに受け取るのではなく、われわれの遺産を保持し、新たにしようとする意識的な努力だからである。」（*Bd. 2, S.32*）（これは、ブルクハルトについて言われた言葉ですが。）

註

- (1) 以下は、二〇二一年一〇月二四日に第七一回東北哲学会での講演に基づいている。
- (2) ハイデガーがナチに加担したことを後悔していない、ということでもあるが、『存在と時間』において「後悔」は位置を持ってないのである。「過去」とは「事実性」あるいは「被投性」としての「現存在」の様態であり、「後悔」などという甘っちょろい心性の対象ではない。むしろ、それは到来的に引き受けられるのでなければならぬ。「先駆的決意性」だから。（SZ, §65）
- (3) 小林秀雄の発言は以下の通り。「この大戦争は一部の人達の無知と野心とから起ったか、それさえなければ、起らなかったか。どうも僕にはそんなお目出度い歴史観は持てないよ。僕は歴史の必然性というものをもっと恐ろしいものと考えている。僕は無智だから反省なぞしない。利巧な奴はたと反省してみるのがいいじゃないか。」（『小

林秀雄全集』第8巻、新潮社、二〇〇一、三三三頁)。もともととは、「近代文学」一九四六年二月。

「歴史の必然性」つまり、人間のさまざまな意図や思惑を超えて貫徹してゆく仮借なき歴史の動向、あるいは「運命」とでもいうべきもの、それを承認することをもたらした「過去」にたいするある種の態度表明である。それは、彼の場合、「仕方がなかった」「それ以外に何もできなかった」といった「弁明」ではない。むしろ「正当化」である。

- (4) 例えは、Schädelbach, Philosophie nach Heidegger und Adorno, in: Zur Rehabilitierung des Animal Rationale, swv1043, 1992. 後藤嘉也『循環と回転』第十一章 他なるものの声―ハイデガーの回転とマルルの否定弁証法、東北大学出版会、2008°。
- (5) Thomas Mann gesammelte Werke in dreizehn Bänden, Reden und Aufsätze 3, S.986ff., Fischer Taschenbuch Verlag, 1990
- (6) “Der Katechismus der Deutschen” von A. Dirk Moses, in: Geschichte der Gegenwart, 23, Mai, 2021; Ein fundamentales Verbrechen, von Saul Friedländer, in: Die Zeit, 28/2021, 143^u°。
- (7) Helmut König, Von Diktatur zur Demokratie, in: Vergangenheitsbewältigung am Ende des zwanzigsten Jahrhunderts, S.375, Westdeutscher Verlag, 1998.

(こけい) けいいさ・仙台大学)